

学校物語 (国吉小の巻13)

一初代校長きまる一

余木 令一

南北両校の統合に際し、どんな結果がそこに待っているかを述べる前に、吉野一松氏が初代校長に就任した経緯にも一言ふれておきたいと思う。

両校が統合され、これからは画期的な

近代様式による新教育が行われるのだから、この統合学校を運営していくかんじんかなめは何といつても校長にある。

何事につけても草創の時期が最も重大であることは言うまでもなく、これを学校創立にあてはめて考えるならば、どんな学風をつくり、どのような伝統を培(つち)かうかということが学校の将来にひいては町の気風に測りしれない影響を及ぼすであろう。この原動力となるものが校長である。

りつばな校舎は町の中央にかがやくであろう。設備もこれにともなつて、とこのうはずである。すなわち残る問題は長たるべきものにその「人」を得ることだけだ。町長はじめ関係者はこの点に深く思いをいたし、これが人選にはすいぶん苦慮したらしい。けつきよく吉野一松氏をおいてはかに人なしと一致し

たので、同氏の出馬を懇請することとなった。問題となるのは郡役所に席をおく係長のことだから、たやすく承知してくれるかどうかの一点である。「受けて下さい」「いや応じかねます」の問答応酬が幾日もつづき、シーソーゲームの根くらべとなつた。しかし、とうとう結着がつけられた。根負けしたのか、それとも情にほだされたのか、測のかぎりでないが、吉野氏が校長就任を引きうけたのである。みんな、ほつとした。多少の迂余曲折があつたにしても、こと国吉小学校に関しては、すべてが理想に近いすがたで進展したからである。そして新校長としての正式発令は明治三十三年四月一日であつた。

吉野先生は大多喜町中野に生まれた。生年は文久三年といふからそのとき日本流にかぞえると三八才であつた筈だ。五尺(一米五五釐)そこそこの短軀の持主でしかなかつたが、校長らしい自然にそなわつた威厳ある風格に、生徒も父兄も最初から畏敬の念を植えつけられてしまつたらしい。校長はこれより南北両校を足繁く往復し、かたがた新校舎建設にも深い関心を寄せねばならない立場にあつたので、三方に目をくばり、一日とて寧日がなかつたという。就任そうそうから精力的に活動せざるを得なかつたのである。